

原民喜「廃墟から」の読み方

—— 作者は、なぜ「廃墟」という言葉を選び取ったのか ——

大高知児

〈キーワード〉 原民喜 広島市 原爆 焼跡 廃墟

一 はじめに——「廃墟」という言葉と広島

昨今は〈廃墟ブーム〉だそうである。世界文化遺産に登録された軍艦島（端島）を初めとして、閉園して放置されたままの遊園地跡や朽ち果てた工場跡などを訪なう人も多いという。また「廃墟」を扱ったネットの情報・写真集や案内書・テレビ番組などがそれなりの人気を得ているらしい。「イミダス²⁰¹⁶」では「ブームの中心は10代後半から30代半ばの世代」で「若者たちは、非日常的な神秘性とともに、ある種の安心感、癒しを廃墟に求めているようだ」と述べている。人々が「廃墟」なるものを通じて異空間体験をすることが目的なのか、往時の構造物や遺棄された物品に触れて時の流れを感じようとしているのか、それは定かでないが、ここでいう「廃墟」には、興味本位の傍観者という影が揺曳して、どこか違和感を覚えてしまうのである。

ところで、「廃墟」という語について、『大漢和辞典』（大修館）では「城又は家屋或は市街などのほろびすたれたあと」と記され、『日本国語大辞典』（小学館）には、「建物・市街などの荒れはてた跡」と記されている。この語は個別の建造物に対しても、市街という空間に対しても用いられる語であることが分かる。さらに、『世界大百科事典』（平凡社）において、荒俣宏はより踏み込んで「建物、市街などが人為的あるいは自然の破壊によって長らくうち棄てられ、機能を失って荒れ果てた跡。エジプトやギリシア・ローマの遺跡、古城や古教会などの遺構に代表され、しばしば人間の営みに対する時の勝利や人造物に対する自然の永遠性、死の遍在の象徴とされる。この言葉からは石の冷たさと無機性が連想されるため、すぐに朽ち果てる木造建築の遺構にはあまり使用されない」と述べてい

る。この解説は、今日の我々が理解する「廃墟」のイメージに適合していよう。つまり「廃墟」となるためには「人為的あるいは自然の破壊によって長らくうち棄てられ、機能を失って荒れ果て」るまでの、時間の経過というものが必要なのである。要するに、「廃墟」とは空間的には、個別限定的なものと同域性を有するものとを併せもつ概念であり、時間的には、しかるべき年月を経て荒れ果てた状態となった場合を指すのである。ただし、瞬時の大きな災禍に起因して、時を経ずして壊滅的な状態になった場合にも使用されることがある。その場合は、〈廃墟と化した〇〇〉という比喩的な表現になることが多い。

例えば、広島市への原爆投下に関わる事象の新聞報道では、一九四五年八月二四日付「毎日新聞」の記事には「残された原子爆弾の恐怖／今後70年は棲めぬ／戦争記念物・広島長崎の廃墟」という見出しで、「この廃墟と化した両市は：広島・長崎の廃墟はいまや戦争記念物として、永く保存すべしといふ声が、各方面から起こりつつある」とあり、一九四五年九月七日付「朝日新聞」の記事には、「生存者の憎悪の眼／夏の太陽の下・廃墟に漂ふ死臭／米人記者のみた広島」という見出しのもと、本文中に「廃墟と化した街の中を彷徨つてゐる数人の日本人の眼は憎悪に燃えてゐる」という一文がある（傍点引用者。いずれも一九四五年八月六日の広島への原爆投下から日を経ずして書かれたものの中に「廃墟」という言葉が早くも現出している。これは、一九四五年九月二日に連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が「日本に与うる新聞遵則」というプレスコードを發布する以前の記事であるために、原爆の被害について、新聞記者自らの印象に基づき〈生々しく〉記されており、その中で「廃墟」という表現も使用されたのである。眼前に展開している光景に強烈な衝撃を受け、それが他ならぬ「廃墟」という言葉として結実したのかも知れない。ただし、この言葉遣いは、読者を意識した扇情的な響きと共に、新聞記者という第三者からの〈客観的〉という名の、冷淡に事態を傍観している様子も感じられる。

これ以降、広島市を初めとする公的機関や個人の手になるものを問わず、数多くの刊行物に、被爆後の広島市という場のありようを「廃墟」として示す記述が頻出していく。〈廃墟と化した広島街〉という表現は、現場に身を置いた当事者が使用する場合は、実感の伴う、実態に即した表現となり得る。ところが、第三者のみならず当事者（側）が用いる場合でも、時間の経過とも相俟つて、ともすれば過去を語る際の常套句と化する傾向が表れてくる。紋切り型の物言いを無自覚的に使用することは、まさに「廃墟」としか表現できない実態を直視するという意識が希薄化していることを示していよう。いわば〈言葉の重み〉が失われてしまっているのである。

そうした「廢墟」という（言葉の重み）を考える素材として、広島市内にあった実家で被爆し、その後、壊滅した「街」を凝視した原民喜の小説「廢墟から」（一九四七年二月号・『三田文学』）がある。原民喜は、その題名と本文に「廢墟」という言葉を使用している。作中人物の「私」が「廢墟」と名指す対象は、長い年月を経た歴史的遺物としての「廢墟」ではなく、一九四五年八月六日のアメリカ軍の空襲において投下された原子爆弾により、一瞬にして倒壊し、その直後に焼失してしまった広島市内の建造物群の跡であり、被爆からわずか一か月半後の九月下旬頃の「街」の姿である。

家の跡を見て来ようと思って、私は猿猴橋を渡り、幟町の方へまっすぐに路を進んだ。左右にある廢墟が、何だかまだあの時の逃げのびて行く気持を呼び起すのだった。京橋にかかると、何もない焼跡の堤が一目に見渡せ、ものの距離が以前より遙かに短縮されているのであった。そういえば、曇々たる廢墟の彼方に山脈の姿がはつきり浮び出ているのも、先程から気づいていた。どこまで行っても同じような焼跡ながら、夥しいガラス塵が気味悪く残っている処や、鉄兜ばかりが一ところに吹寄せられている処もあつた。（引用者注・原民喜の作品からの引用は岩波文庫版『夏の花』による。当該部分は同書48～49頁。傍点は引用者が付したもの。以下、作品からの引用にあたっての頁表記と傍点については同様である）

「廢墟」という言葉は、〈廢墟から〉という題名となつていても関わらず、作品中ではこの引用部分の二か所でしか使われていない。はたして、この「廢墟」という言葉を、作者である原民喜は、なぜ選び取つたのか、そこにはどのような想念が込められているのか。その問題について、「廢墟から」という物語の解析と、小説集『夏の花』に収録された「夏の花」・「小さな村」・「氷花」などの作品との比較検討を通じて、説明していくことが本稿の目的である。

二 「廢墟」に辿り着くまで（1）——車窓の景から回歸する記憶

「廢墟から」という物語は、「私」という人物が、広島市内で被爆して「八幡村へ移った当初」（34頁）である一九四五年八月上旬

のことから、「上海から復員して帰って来た」「榎氏」という人物が行方不明の妻子を捜す「あの当時から数えて四ヶ月も経っている今日」(57頁)、即ち、一九四五年二月までのことが、基本的には時の流れに即して順に語られている。また、語りの「今」ついては、「榎氏の家は大手町の川に臨んだ閑静な栖いで、私もこの春、広島へ戻って来ると一度挨拶に行ったことがある」(38頁)とあり、一九四五年内の時点である。

物語は、まず「私」が疎開先である八幡村への移動して以降、八月一五日の「ラジオ」放送直後までのことが、八幡村での「悲惨な生活」と「私」が衰弱していく過程を中心にして語られる。やがて「休戦」という事態になって、一時の落ち着きは得たものの「飢えと業苦の修羅」は続く。八月下旬から眼の異常や下痢などで体調を崩し、九月に入ってから長雨や「颱風」——一九四五年九月一七日に鹿児島県枕崎付近に上陸して、広島県に甚大な被害(死者・行方不明者二〇〇人以上・橋梁流失一〇〇〇か所以上)をもたらした超大型の枕崎台風のこと——などの不順な天候に悩まされる。九月下旬になり、天気も回復し、妻の一周忌も近づいたので、妻の郷里である本郷町(現在の三原市)にいる義母に会おうと思いい立ち、鉄道の運行状況を確かめるために廿日市駅まで出向くものの、「颱風」の被害により目的地への開通見込みが翌月上旬以降であることを知らされるのである。

広島までの切符が買えたので、ふと私は広島駅へ行ってみることにした。あの遭難以来、久ぶりに訪れるところであった。五日市まではなにごともないが、汽車が己斐駅に入る頃から、窓の外にもう戦禍の跡が少しづつ展望される。山の傾斜に松の木がゴロゴロと雑倒されているのも、あの時の震駭を物語っているようだ。屋根や垣がさつと転覆した勢をそのままとどめ、黒々とつづいているし、コンクリートの空洞や赤錆の鉄筋がところどころ入乱れている。横川駅はわずかに乗り降りのホームを残しているだけであった。そして、汽車は更に激しい壊滅区域に這入って行った。はじめてここを通過する旅客はただただ驚きの目を瞠るのであったが、私にとってはあの日の余燼がまだそこに感じられるのであった。汽車は鉄橋にかかり、常盤橋が見えて来た。焼爛れた岸をめぐって、黒焦の巨木は天を引掻こうとしているし、涯てしもない燃えがらの塊は蜿蜒と起伏している。私のはあの日、この河原で、言語に絶する人間の苦悶を見せつけられたのだが、だが、今、川の水は静かに澄んで流れているのだ。そして、欄杆の吹飛ばされた橋の上を、生きのびた人々が今ごろぞろと歩いている。饒津公園を過ぎて、東練兵場の焼野が見え、小高いところに東照宮の石の階段が、何かぞつとする悪夢の断片のように閃いて見えた。つきつきに死んでゆく夥しい負傷者

の中にまじって、私はあの境内で野宿したのだった。あの、まっ黒の記憶は向に見える石段にまだまざまざと刻みつけられてあるようだ。(47～48頁)

廿日市駅から広島駅までの車窓越しに「私」の眼に飛び込んでくる「戦禍の跡」とその印象、そこから自ずと蘇ってくる、八月六日から八月八日までの「あの日」「あの時」の「あの、まっ黒の記憶」によって形象されている情景である。まず、「私」の眼に映じた主な施設の「あの時の震駭」の実状について整理しておく。

山陽本線の「己斐駅」(木造平屋建一部スレート葺・爆心地から約2.4km)は駅舎が倒壊した。「横川駅」(木造モルタル・北口木造二階建・爆心地から約1.8km)と「広島駅」(本駅木造一部鉄筋・爆心地から約2km)は原爆により全焼した。この内、「己斐駅」と「横川駅」の被爆後の駅舎については「私」が初めて眼にするものである。なお、「広島駅」については、「廃墟から」には記載がないが、原民喜が被爆直後に書き記し、後に小説「夏の花」へと昇華する「原爆被災時のノート」には八月八日の事項として「翌朝目ザメテ肩凝ル。広島駅ノ方へ行ツテ見ルニ、広島ノ街ハ满目灰白色ナリ、福屋ナドノビルワズカニ残ル。馬一匹、練兵場ニサマヨフアリ。駅ニハ少年水兵作業ヲナス。横川ヨリ汽車アル由キイテ帰ル」と記されており、原民喜本人は被爆直後に「広島駅」には赴いているのである。

「汽車は鉄橋にかかり、常盤橋が見えて来た」とあるが、この鉄橋は、京橋川(神田川)の上流にある「常盤橋」のすぐ上手に架かる山陽本線の神田川鉄橋のことである。八月六日、折から進行中の下りの第三七七貨物列車が爆風により脱線転覆し、積載していたドラム缶が火災により次々爆発した。「常盤橋」(幅員5.5m・橋長159m)は、京橋川に架かる、白島と二葉の里とを結ぶ橋で、被爆当初には欄干が崩落し、熱線による自然着火で橋床のアスファルトの路面が燃え出すという事態が生じて、一時渡ることができなかつた。また、橋の西詰め消防署のガソリンが炎上して付近の民家に延焼し、その猛火のために渡れない時もあったといふ。^②

かつて「私」も訪れたはずの「饒津公園」は、多くの広島市民が集う場所として賑わった公園であったが、当然のことながら往時の面影はそこ求めようもない。それに近接する「東練兵場」は広島市内東部の尾長・大須賀地域に一八九〇年設置された歩兵演習のための軍事施設で、一九四五年になってからは、その敷地の大半が軍隊の食糧自給のための芋畑となっていた。被爆後は、施療所(被災した人のために無料で負傷の手当や病気の治療をする所)が設置されていた。その北側に隣接する「東照宮」は、一六四六年に藩主浅野光晟が建立した神社で、被爆前は軍の通信施設として利用されていたが、原爆により本殿・拝殿などは焼失した。施療所は「東照宮」

の鳥居の下の方に設けられていた。八月七日になり、被災者の殺到した「東練兵場」では「東照宮」の石段下にも天幕を張って臨時救護所が設けられ、境内に駐屯していた通信兵や、急遽来援した陸海軍救護隊や郡部の医師会派遣の医療救護班によって、救護・治療活動がおこなわれたという。⁽³⁾「私」は、その「東練兵場」において、しかるべき処置を受け、その「東照宮」の境内で「野宿」したのである。

「私」が「廢墟」という認識／言葉に至る過程には、こうした「戦禍の跡」から浮上する「悪夢」のような記憶の回帰があったということ、を、まず確認しておく必要がある。

三 「廢墟」に辿り着くまで (2) —— 「猿猴橋」がもたらしたもの

「妻の一周忌も近づいていたので、本郷町の方へ行きたい」(46頁)という「私」の強い思いは「広島駅」に着いた後も、途絶えてしまうことはなかった。しかしながら、「宇品から汽船で尾道へ出れば、尾道から汽車で本郷に行けるのだが、汽船があるものかどうかも宇品まで行って確かめてみなければ判らない」ので「二時間おき」に出るはずの「宇品行のバスの行列に加わ」るものの、炎天下に「これに乗ろうとする人は数丁も続いて」おり、「今から宇品まで行って来たのでは、帰りの汽車に間に合わなくなる」ので、「私」は「断念」せざるを得ない。山陽本線の運休に続き、ここでも当時の交通事情が、「私」の行動に影響を及ぼすのである。

広島電鉄の路面電車、紙屋町→向宇品間、広島駅前→己斐間の運行は、一九四五年の一〇月の復旧を待たねばならない。⁽⁴⁾そのため人々は宇品方面にはバスを利用することになるのだが、一九二八年に広島駅から宇品港方面への乗合自動車の営業が開始されたものの、一九三八年以降はガソリン消費制限によって木炭車となり、戦後には木炭も不足して薪バスまでも導入されたという。⁽⁵⁾さらに、原爆によりバス車両の被害も甚だしく「バスは郊外線を含み、100両中68両が使用不可能となった」という。⁽⁶⁾いずれにせよ、一九四五年九月時点のバスの円滑な運行は望むべくもなかったのである。

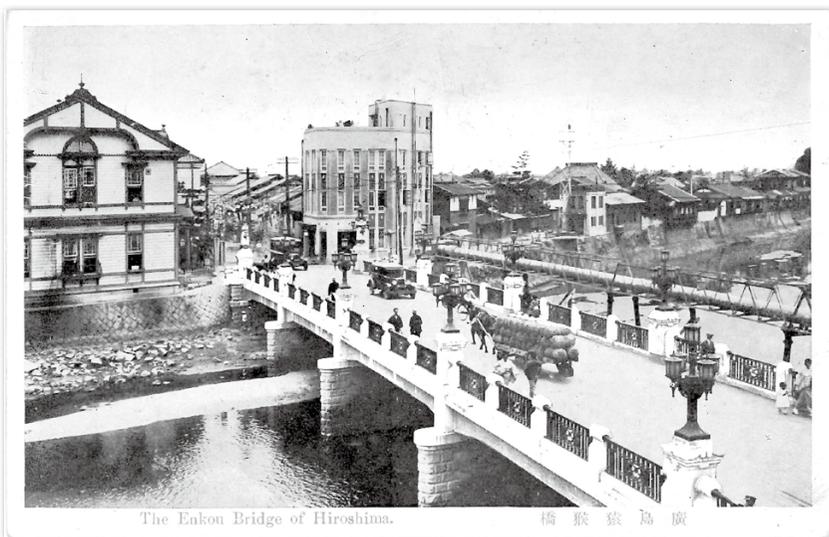
そこで「私」は、実家の跡の様子を見ようと新たな行動を起こす。すなわち、本稿「一」で引用した箇所冒頭の一文「家の跡を見て来ようと思つて、私は猿猴橋を渡り、幟町の方へまっすぐに路を進んだ」(48頁)のである。「私」の「廢墟」という言葉の選択に

は、「広島駅」から「路」すなわち山陽道（旧西国街道）を西に約三〇〇m程進んだ地点に位置する「猿猴橋」（橋長^{62.4}m、幅員8.5m）を図らずも渡ったということも影響を及ぼしているのではないか。猿猴川にかかる「猿猴橋」については、広島県のHPに、次のように紹介されている。

猿猴橋は、広島城下の西国街道に架かり、広島市の「東の玄関口」として、古くから交通の要衝であった。明治時代に入ってから、この街道は国道へと変遷し、明治19年には旧橋である木橋へと架け替えられたが、（中略）旧橋は老朽化とも相まって架け替えを迫られたのであった。こうした背景の中、大正14年6月に着工された現在の猿猴橋は、鉄筋コンクリート連続桁となり、橋台には地杭52本、橋脚にはケーソン基礎を施工したほか、表面には石張りをあしらひ美観にも配慮した。さらには、総花崗岩造りの高欄に、巨大な親柱・束柱も備わり照明燈まで内蔵されるといふ、重厚なものであった。極め付きは、親柱上に施されたブロンズ製の大鷹や、束柱上のシャンデリア風の電飾燈、高欄には橋名の由来ともなっている、2匹の猿が桃を持ちあう透彫り風のデザインパネルがはめ込まれるなど、絢爛豪華な橋は大正15年3月に完成した。⁽⁸⁾

一九二六年に生まれ変わった「猿猴橋」の華やかな装飾を施した様子は、〈資料〉として提示した絵葉書からも伺える。⁽⁹⁾ すなわち、「猿猴橋」は絵葉書の素材となるような、広島という「街」の象徴的な存在だったのである。

〈資料〉



かつて「私」は幼少期に、木橋の「猿猴橋」を見知っていたはずである。その後「私」は、鉄筋コンクリートの「絢爛豪華な橋」と生まれ変わった「猿猴橋」を渡り、その姿を眼にしていたであろう。ただし、その金属製の装飾は、アジア太平洋戦争における金属類回収令によって、一九四三年には取り外され、その後は石製の飾りが代わりに据えられたという。「この春広島に戻って」（38頁）きた「私」は、優美さが失われてしまった「猿猴橋」の様を目撃することになったのである。さらに、八月六日の被爆からおよそ一か月半が経過した時点で「私」はその橋を渡ったのである。爆心地からの距離が約一・八二kmの地点にあった「猿猴橋」は「爆風によりランカンが破壊された」という状態であった。¹⁰⁾

木橋の記憶、「絢爛豪華」なたたずまい、戦局の悪化に伴い改修されてしまった形状、さらには、今、ここにある原爆による傷跡を帯びた姿、そうした「猿猴橋」の、時代に翻弄された不可逆的な変貌を「私」は見てきたのである。「明治期」から「大正期」における〈軍都〉から〈商都〉への展開、「昭和期」における戦時体制と原爆投下による災禍、こうした広島という「街」の変容を象徴するもののひとつがこの「猿猴橋」であったのである。本文に明示されていないが、「猿猴橋」を目の当たりにして、それを渡るとき、改めて、そこに長い年月が凝縮されたような感覚を「私」が抱き、自らの視角に多少なりとも変化をもたらしたとしても不思議ではない。すなわち、「橋」それから「街」に関わる時空間の変転を実感することで、「私」の想像力も刺激を受け、それから「廢墟」という認識も浮上していったのではあるまいか。

なお、「私」がその後に渡ることになる、京橋川にかかる「京橋」（橋長64.5m、幅員8m）とは、「私」の眼差しに微妙な差異が生ずるはずだ。「猿猴橋」と同じく一九二六年に鋼鉄桁の橋として新たに架け替えられた「京橋」は、「猿猴橋」に比して地味な造りであった。金属製の飾りは「猿猴橋」と同じ時期に同じ趣旨で取り外されたが、「猿猴橋」ほどには外観上の変化はなかった。爆心地より約一・三八kmの地点ではあったが、橋上路面方向が爆風に沿っていたために、損傷をほとんど受けることなく、多くの避難者が利用できたという。¹¹⁾すなわち、今、ここで「私」が眼にしている「京橋」は、ほぼ昔のままの姿をとどめているのである。また、この「京橋」は「私」の実家がある「幟町」の「一路」（旧西国街道）沿いにあり、幼少期の「私」が慣れ親しんだ橋であり、その後も日常的に利用した橋であったはずだ。「京橋」は「私」の眼に映ってはいいたものの、改めて注視したり、想念が浮上したりするような対象ではなかったであろう。

それのみならず、橋の上にて「私」の眼に飛び込んでくるのは、様相が一変した実家のある一帯の光景だったのである。この後、

「私」の思いは「廢墟」という認識を経て、実家跡へと焦点化していくことになる。その点については「七」で考察する。

四 別の〈仮構的小宇宙〉から(1)——「廢墟」という認識の基底にあるもの

ここで、「廢墟から」という作品Ⅱ〈仮構的小宇宙〉の「廢墟」という言葉について、原民喜による別の〈仮構的小宇宙〉から照射してみる。小説集『夏の花』に同じく収録されている表題作「夏の花」(一九四七年六月号・『三田文学』)には次のような記述がある。

その大きな楓は昔から庭の隅にあつて、私の少年時代、夢想の対象となつていた樹木である。それが、この春久し振りに郷里の家に帰つて暮すようになってからは、どうも、もう昔のような潤いのある姿が、この樹木からさえ汲くみとれないのを、つくづく私は奇異に思つていた。不思議なのは、この郷里全体が、やわらかい自然の調子を喪つて、何か残酷な無機物の集合のように感じられることであつた。私は庭に面した座敷に這入つて行つた際に、「アツシャ家の崩壊」という言葉がひとりりで浮んでいた。(13頁)

一九四五年八月六日、「隣の製薬会社の倉庫から赤い小さな焰の姿が見えだした」ために「いよいよ逃げだす時機」だと判断した「私」が、実家を退去する「最後」の時点で確認したものが「庭の隅」にあつた「ポックリ折れ曲がつた楓」だったのである。「この春久し振りに郷里の家に帰つて暮らす」ことになつたのは、この夏に初盆を迎える妻の弔い・納骨のためである。

「久し振りに」帰郷して生活すると、最もなじみ深いはずの「その大きな楓」からさえも、みずみずしい情感が失われてしまつたと感じる。「私」の「その大きな楓」という自然物に抱いた違和感は、「不思議な」ことに「やわらかい自然の調子を失つて何か残酷な無機物の集合のように」感じられてしまう。「この郷里全体」という空間にも同様に及んでおり、「街」からは生命の営みが醸し出す落ち着いてしつとりとした雰囲気や温かみを感じられず、まともに見ることができないほどひどい状態になつてしまつたというのである。

これは、アジア太平洋戦争も末期となり、広島市の〈軍都〉としての機能は防空・防衛ということに重点が置かれ、軍人や勤労奉仕の人々の姿ばかりが目立つようになり、「建物疎開」——焼夷弾や爆弾による火災の延焼を防ぐために、建物を取り壊して消防道路、防空小空地を確保することで、広島市内では一九四四年一月から始まり、一九四五年八月段階では市内六か所で作業が進められ、疎開件数は一万戸近くに及んだという⁽¹²⁾——が本格的に実施され、「街」の景観が変容したこともあって、「郷里全体」が「残酷な無機物の集合」ように変わってしまったという印象が生まれたのである（そうした対象を否定的に眼差してしまう背景には、こうした外在的要因とは別に、妻との死別という内在的要因も影響していよう）。この「残酷な無機物の集合」という表現には「廃墟」という言葉に通底したものがあある。

また、同じ「夏の花」において、避難所から次兄の家族と共に、馬車で八幡村に移動する際に、「私」が眼にした衝撃的で陰惨な光景は次のように記述されている。

馬車はそれから国泰寺の方へ出、住吉橋を越して己斐の方へ出たので、私は殆ど目抜の焼跡を一覧することが出来た。ギラギラと炎天の下に横わっている銀色の虚無のひろがりの中に、路があり、川があり、橋があった。そして、赤むけの膨れ上った屍体がところどころに配置されていた。これは精密巧緻な方法で実現された新地獄に違いなく、ここではすべて人間的なものは抹殺され、たとえば屍体の表情にしたところで、何か模倣的な機械的なものに置換えられているのであった。苦悶の一瞬足掻いて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでいる。電線の乱れ落ちた線や、おびただしい破片で、虚無の中に瘻瘻的の図案が感じられる。だが、さっと転覆して焼けてしまったらしい電車や、巨大な胴を投出して転倒している馬を見ると、どうも、超現実派の画の世界ではないかと思えるのである。国泰寺の大きな楠も根こそぎ転覆していたし、墓石も散っていた。外廓だけ残っている浅野図書館は屍体収容所となっていた。路はまだ処々で煙り、死臭に満ちている。川を越すたびに、橋が落ちていないのを意外に思った。この辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方が応わしいようだ。それで次に、そんな一節を挿入しておく。

灰白色ノ燃エガラガ

ヒロビロトシタ パノラマノヨウニ

アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキミヨウナリズム

スベテアツタコトカ アリエタコトナノカ

パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ

テンプクシタ電車ノワキノ

馬ノ胴ナンカノ フクラミカタハ

プスプストケムル電線ノニオイ(27、28頁)

「私」の「目抜の焼跡」の「印象」を、〈散文〉で表現して、次にそれを〈韻文〉に書き改めて表現しているのである。ちなみに、「片仮名で描きなぐる」という表現から「夏の花」という物語が、「私」と称する人物が書き記した〈手記〉であることが明らかになる。⁽¹³⁾

〈散文〉の中で用いられている「虚無のひろがり」・「虚無の中」とは、眼前に展開するところのない空間全体を言いとめた観念的な言葉である。また、「屍体がところどころに配置されていた」・「精密巧緻な方法で実現された新地獄」・「模型的な機械的なものに置換えられている」・「痙攣的の凶案」・「超現実派の画の世界」などの表現は、眼前の光景に、自然の景ならば当然感じられるはずの生命感というものが失われており、あたかも何者かの手によって作られた人工物であるかのように感じられてしまう、ということを示している。それを〈韻文〉においては、自然の潤いや生命感が完全に喪失してしまったように感ずる状態を「パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ」という表現に一気に込め、作画的・人工的であるかのように映る景観を「パノラマ」——ここでは背後に遠景を配し、その前に都市や戦場などの立体的な模型を置き、あたかも実際の光景を見るかのように凝らした装置のことを指している——という喩えに凝縮したのである。

こうした表現は、前述の「残酷な無機物の集合」の延長線上にありつつも、単なる直感による視覚的イメージではなく、眼前に展開する生々しい実景に裏打ちされた、一九四五年八月八日、被爆後の壊滅した「街」に対する、きわめて現実的な空間把握なのである。⁽¹⁴⁾

「二」で触れた「原爆被災時のノート」における「広島ノ街ハ満目、灰、白色ナリ」という表現はそれを具体的に示している。さらに、冒頭で引用した荒俣宏の「この言葉（引用者注・廃墟のこと）からは石の冷たさと無機性が連想される」という文言にも符合するものとなっている。「夏の花」という別の〈仮構的小宇宙〉の言説ではあるが、「街」に関わって抱いた「残酷な無機物の集合」という感覚や、「街」の「目抜の焼跡」に対して看取した、自然の潤いや生命感が失われて「パノラマ」の如くと化したという印象が、「廃墟から」における「廃墟」という認識の基底には存在している。

五 別の〈仮構的小宇宙〉から(2) —— 「廃墟」という言葉の異なる使われ方

「廃墟から」という作品以外にも、小説集『夏の花』に収められた作品の中で「廃墟」という言葉は使用されている。ここでは、その用いられ方や意味合いについて分析してみる。

「小さな村」（一九四七年八月号・『文壇』）では、次のような文脈で用いられている。これは、「小さな村」（作品中で明示化はされていないが、地理的關係や施設などからして、原民喜が実際に身を寄せていた、広島県佐伯郡にあった八幡村を舞台にしていると考えて差し支えない）をできるだけ早く脱出して東京へ転住したいという思いに駆られている「私」という人物の一九四六年一月時点の感想である。

年が明けても、飢えと寒さに変わりはなく、たまたま読んだアンデルセンの童話も、凍死しかかる昆虫の話であった。どこかへ、私も脱出しなければ、もう死の聲音が近づいてくるような気がした。広島の廃墟をうろつく餓死直前の乞食も眼に沁みついていたが、…（139頁）

また、「氷花」（一九四七年二月号・『文学者会議』）では、「廃墟」という言葉は二つの場面において都合三回使用されている。この作品は、一九四六年時点の、視点人物である「彼」の思いが綴られている。まずは、「八幡村で次兄の家に厄介になっていて、飢えに苛

まれ衰弱していく」(171頁) 状態にある「彼」の感想中に二か所用いられている。

新しい人間が見たいという熱望も彼にはあった。彼があの子爆弾で受けた感動は、人間に対する新しい憐憫と興味とといった位だった。急に貪婪の眼が開かれ、彼は廢墟のなかを歩く人間をよく見詰めた。廢墟の入口のべとべとの広場に出来た闇市には頭髮をてらてら光らした派手なマフラーを纏っている青年や、安っぽい衣裳の女を見かけるようになった。憩える場所の一つもない死の街を人々はぞろぞろ歩いており、ガタガタの電車は軋みながら走った。(172頁)

もう一つは、八幡村を出て上京したくても、それが実行できずにいる「彼」に対する「長兄」とその「嫂」からの激励に名を借りた批判・揶揄や、「妹」からの、行動力を身につけた息子について記した、どこか当てつけがましい手紙の文書の紹介に次ぐ場面にそれはある。

川口町の姉は彼の顔を見ると、息子のことを話した。父親と死別れたこの中学二年生の少年は急に物腰も大人じみていたが、いつの間にか物資の穴とルートを探り当てて、それを巧みに回転さすのだった。そうして得た金では屋根を修繕させたり、鱈腹飯を食べたり、闇煙草を吸うのであった。彼は殆ど驚嘆に近い気持で、十六歳の甥を眺めた。こうした少年は、しかし、今いたるところの廢墟の上で育って行っているのかもしれない。(175頁)

「小さな村」や「氷花」における「廢墟」という言葉は、いずれも特定の建物の荒廢ではなく、市街が荒れはてた跡という意味で使用されている。双方に共通している基調は、避難先から寄宿先となった八幡村での不遇な状況への嘆きと、何はともあれ東京に脱出することへの希求という点である。「廢墟」とは、そうした心境のもと、八幡村において、郷里であり、一九四五年に身を置いていた広島という「街」を想起したときに語られている言葉である。「小さな村」の「広島の廢墟をうろつく餓死直前の乞食」という表現や「氷花」の「彼は廢墟のなかを歩く人間をよく見詰めた。廢墟の入口のべとべとの広場に出来た闇市には頭髮をてらてら光らした派手なマフラーを纏っている青年や、安っぽい衣裳の女を見かけるようになった」・「こうした少年は、しかし、今いたるところ

の廢墟の上で育って行っているのかもしれない」という表現には、「憩える場所の一つもない死の街」という感情を覚える当該の空間に対して、その中に存在する人間を「貪婪の眼」で捉えた冷淡な評価とを併せて、否定的な意味合いを「廢墟」という語に込めていることは明らかである。「小さな村」にはそうした思いを露骨に語った次のような表現もある。

足首のところを絞るようになっている軍のズボンを着ている男たちの恰好も、無性に嫌だったが、急に厚化粧をして無智の衣裳をひけらかしている女も私をぞっとさすのだった。／見捨ててしまえ！　こんな郷土は……／私はいつも私に叫んでいたものだ。(142、143頁)

広島という「街」において「私」／「彼」の目に留まる人物に対する生理的な嫌悪の情が、ふるさとの「街」そのものへの否定的感情を増幅させているのである。それが「小さな村」や「氷花」においては、「廢墟」という言葉に被せられているのである。ただし、そうした過激な物言いを為すのは、とにかく東京で暮らしたいという無媒介的な願望の反動である、という点は確認しておく必要がある。

ところで、「廢墟の入口のべとべとの広場」に由来した「闇市」とあるが、「廢墟の入口のべとべとの広場」とは、荒廢した「街」への「入口」となる広島駅前の湿気を帯びてぬかるんでいる状態だとされる「広場」のことである。また、ここでいう「闇市」とは、石丸紀興の考証によれば、一九四五年の八月下旬頃から広島駅前広場内に「自然発生的」に出現した「配給ルートでなく統制物資を販売する店舗や店舗群」であるところの「ヤミ市」のことで、一九四六年一月上旬頃まで同所に存在し、その後、駅前広場の南面に位置する「松原町下の段」に警察当局により強制的に移転させられたものである。⁽¹⁵⁾人々が「街」で生き残るために欠くことのできないものではあるが、どこかしら、いかがわしさを漂わせる「闇市」という場は、「私」／「彼」が「廢墟」と名指す荒涼とした空間の「入口」として相応しいものであったのだろう。

要するに、「小さな村」や「氷花」における「廢墟」とは、辺り一帯の建造物の物理的荒廢が顕著で、そこに身を置く人々のありようも健全さに欠けてしまっているような、いわば否定的イメージを伴うような空間を指している言葉なのである。「小さな村」や「氷花」が創作された時期は、初出の発行年月から鑑みて、「廢墟から」と同じく一九四七年段階と考えられる。しかしながら、後

述するところの「廃墟から」における「廃墟」という言葉の意味合いとは懸隔がある。

六 「廃墟から」における言葉の選択(1) —— 「焼跡」という語について

「廃墟」という語を検討するにあたって、まず、「廃墟から」において多用されている「焼跡」という表現について確認しておくことが必要である。「焼跡」という言葉は「それにしても、あの日、饒津の河原や、泉邸の川岸で死狂っていた人間たち、——この静かな眺め(引用者注・八幡川の堤からの景色)にひきかえて、あの焼跡は一体いまだうなっているのだろう」(36頁)という最初の使用例から始まって、作品中では延べ一二か所で用いられている。本稿では便宜上、「廃墟から」本文で記されている順に「焼跡」に①から⑫の番号を付すことにする。

最初に用いられた①「焼跡」とは、被爆直後の「私」が「境内で野宿した」折に、さらに避難先である八幡村へ移動している際に眼にした光景を想起したものである(36頁)。また、②は「新聞によれば、七十五年間は市の中央には居住できないと報じているし、人の話ではまだ整理のつかない死骸が一万もあつて夜ごと焼跡には人魂が燃えているという」(36頁)という文中にある。この「焼跡」は「夜」の怪しげなイメージが添加された伝聞によるものである。なお、③と④の「焼跡」については、本稿「一」で「廃墟」という言葉と共に引用した部分(48、49頁)に記されたものであり、次章で検討を加える。

⑤は「広島駅に来てみると、呉線開通は虚報であることが判った。私は茫然としたが、ふと舟入川口町の姉の家を見舞おうと思いついた。八丁堀から土橋まで単線の電車があつた。土橋から江波の方へ私は焼跡をたどった。焼け残りの電車が一台放置してあるほかは、なかなか家らしいものは見当らなかつた」(51頁)という文中にある。「焼跡」という事実と眼に入ったものについて淡々と叙述しており、そこに特段の思いは示されていない。物語では、その後、「私」は「舟入川口町の姉の家」で煩っている義兄を見舞った帰りに「長兄の家」に立ち寄ることが描かれている。

⑥は「明日彼(引用者注・妹の息子の史朗のこと)を八幡村に連れて行くことにして、私はその晩長兄の家に泊めてもらった。が、どういふものか睡苦しい夜であつた。焼跡のこまごました光景や、茫然とした人々の姿が睡れない頭に甦つて来る」(53頁)という箇所にあ

る。「焼跡のこまごました光景」という表現に、⑤では語られなかった目に焼き付いて離れないものが、その「焼跡」には多々あったということが示されているが、これもその場の景そのものではなく、後になって「私」の脳裏に浮かんできたものである。

⑦と⑧の「焼跡」は義兄の葬儀からの帰りの場面にある。これは、「廃墟から」の「私」に関する物語の最後の部分であり、その後が続く「流川町の楨氏」に関する物語との区切りを為す部分である。

私と次兄とは川の堤に出て、天満町の仮橋の方へ路を急いだ。足許の川はすっかり暗くなっていたし、片方に展がっている焼跡には灯一つも見えなかった。暗い小寒い路が長かった。どこからともなしに死臭の滲って来るのが感じられた。このあたり家の下敷になつた儘とり片づけてない屍体がまだ無数にあり、蛆の発生地となつていて聞くことを聞いたのはもう大分以前のことであったが、真黒な焼跡は今も陰々と人を脅すようであった。ふと、私はかすかに赤ん坊の泣声をきいた。耳の迷いでもなく、だんだんその声は歩いて行くに随つてはつきりして来た。勢のいい、悲しげな、しかし、これは何という初々しい声であろう。このあたりにもう人間は生活を営み、赤ん坊さえ泣いているのであろうか。何ともいいしれぬ感情が私の腸を抉るのであった。

(56頁)

⑤と同じ「焼跡」の傍らを歩みながらも、あたりが暗いためにそれを視覚的には把握できていない。その代わり嗅覚と聴覚とが鋭敏になり、「焼跡」の生々しさを感ずることができたのである。そこから発せられる「赤ん坊の泣声」。その「初々しい声」に「私」は、人間のもつ活力、もしくはしたたかな生命力なるものを感じて、大いに心が動かされた、という印象深い情景である。なお、この場面については、「廃墟から」という題名の問題と関わって最後の「八」で検討する。

⑨から⑫までは、「私」に関する物語の後の、作品の最後に置かれている「流川町の楨氏」に関する物語の中にある。この人物については、「私」に関する物語の中でも「流川町の楨氏」も、これは主人は出征中で不在だったが、夫人と子供の行衛が分らなかった(38頁)と簡単に触れられている。「流川町の楨氏」の話は、「楨氏は近頃上海から復員して帰つて来たのですが、帰ってみると、家も妻子も無くなっていました」(57頁)という一文から始まり、「実際、広島では誰かが絶えず、今でも人を捜し出そうとしているのでした」(59頁)という文で結ばれている話で、文体もそれまでの常体ではなく敬体になっており、語りの形態も一人称語り(「私」

は)から非人称第三者の語り(「榎氏」は)となっている。小説「夏の花」が「私」の語る「私」の物語の後に、「私」の語る「N」の話で締めくくられているのと基本的には同じ構造である。⁽¹⁶⁾

⑨は「榎氏にしてみても、細君の郷里をはじめ心あたりを廻ってはみましたが、何処でも悔みを云われるだけでした。流川の家の焼跡へも二度ばかり行ってみました」(57頁)とあり、これは事実関係を述べている過ぎない。

⑩から⑫の「焼跡」は次の通りである。

榎氏は電車の中や駅の片隅で、そんな話(引用者注・八月六日の出来事に関する話)をきくのが好きでしたが、広島へ度々出掛けて行くのも、いつの間にか習慣のようになりました。自然、己斐駅や広島駅前の闇市にも立寄りました。が、それよりも、焼跡を歩きまわるのが一種のなぐさめになりました。以前はよほど高い建ものにも登らない限り見渡せなかった、中国山脈がどこを歩いているか一目に見えますし、瀬戸内海の島山の姿もすぐ目の前に見えるのです。それらの山々は焼跡の人間達を見おろし、一体どうしたのだ? と云はんばかりの貌つきです。しかし、焼跡には気の早い人間がもう粗末ながらバラックを建てはじめていました。(57～58頁)

「榎氏」の達観したかのような態度を、語りかけるような物言いで形象していることで、ここでの「焼跡」という言葉には殺伐とした印象は感じられない。これらの「焼跡」はいずれも「榎氏」の眼差しの中で捉えられた事実を「私」が伝え聞いたものであり、また、文脈上、特に意味付けをする必要のないものである。ただし、「流川町の榎氏」に関する物語の中心的話柄は、「私」が〈共苦〉している「榎氏」のやるせない思いと、末尾の「実際、広島では誰かが絶えず、今でも人を捜し出そうとしているのではした」という一文が示すように、人々の終結なき嘆声であることは確認しておく。

改めて確認するまでもないが、「焼跡」という語は、『日本国語大辞典』でも「焼けたあと。火事で焼けたあと」と簡潔にその意が示されているように、事象をそのままに言い表したものであり、言葉自体に多義性や含意性はない。その上、「廃墟から」における「焼跡」という語は⑤を除き(③と④については後述する)いずれも伝聞や回想によるもので、「私」がその時・その場で視覚的に直接捉えたものではない。

七 「廃墟から」における言葉の選択（2）——「廃墟」という語が意味すること

では、「廃墟から」本文における「廃墟」という言葉は、どのような思いを込めて用いられているのか。改めて当該部分を引用する。前にも触れたが、「廃墟」という言葉は、この作品が「廃墟から」という題名となっているにも関わらず、この部分でしか使われていないのである。

家の跡を見て来ようと思って、私は猿猴橋を渡り、幟町の方へまっすぐに路を進んだ。左右にある廢墟が、何だかまだあの時の逃げのびて行く気持を呼び起すのだった。京橋にかかると、何も無い焼跡の堤が一目に見渡せ、ものの距離が以前より遙かに短縮されているのであった。そういえば、曇々たる廢墟の彼方に山脈の姿がはつきり浮び出ているのも、先程から気づいていた。

どこまで行っても同じような焼跡ながら、夥しいガラス塵が気味悪く残っている処や、鉄兜ばかりがひとところに吹寄せられている処もあった。（48～49頁）

まず、ここでの「焼跡」（③と④に相当する）という言葉は、「何もない焼跡の堤が一目に見渡せ」・「どこまで行っても同じような焼跡ながら」とあるように、⑤を除く他の用例とは異なり、「私」がその時・その場で、目の前の状態を視覚的に捉えたものであるが、他の「焼跡」という言葉と同様に、その状態なり、事実なりを直截に表現しているに過ぎない、ということである。なお、「焼跡」に関わって、建造物が焼失してしまい、遮るものがないことで「ものの距離が以前より遙かに短縮されている」という「私」の感覚が語られている。ただし、視野が開けたことで、対象までの隔たりが以前より縮まって見えるという感覚は、そうした状況に遭遇した際には、誰しもが普通に経験することである。つまり、③の「焼跡」の用法に特異性があるわけではなく、他の「焼跡」と同じ位相のものである。

それに対して「廃墟」という言葉は、どのように用いられているか。「路の左右にある廢墟」とあるが、「猿猴橋」を渡った左右の路沿いは京橋町であり、左方には的場町・金屋町・比治山町一带が、右方には台屋町一带があった。この辺りは八月六日の原爆炸裂による瞬間的被害で総ての家屋は全壊し、その後の火災で全焼した地域である。¹⁷⁾

よって「焼跡」と表現しても差支えない地域であるのだが、なぜ敢えて「廢墟」としたのだろうか。そこで注目すべきは、眼前の状態を前にしたことにより「何だかまだあの時の逃げのびて行く気持を呼び出す」という状態になった、ということである。まず確認しなければいけないのは、今、「私」の視野に入ってくるものは、「逃げのびて行く」、すなわち、迫り来る火を回避するために、崩壊した実家を脱出して、倒壊した家屋の上を乗り越えながら避難した「あの時」の光景ではなく、周囲の総ての建造物が完全に焼失してしまっている状態の景なのである。つまり、視覚的に類似した状況による連想が、「あの時」の恐怖や不安などの否定的な「気持」を「呼び出す」のではないということだ。だとすれば、可能性として考えられるのは、対象を「廢墟」として捉えるという、その時の認識そのものが、そうした「気持」を「呼び出す」ことにつながった、ということである。

ここで示されている「廢墟」とは、見慣れた景観もしくは風物が完全に壊滅して、空間が変容してしまったことによる、いわば空虚な思いというのが反映した言葉である。一方で、「廢墟」とは、眼差す対象のありようが、時間が止まってしまったように、さらに、何ものをも生成しない原初の空隙のように感じられたとしても、その場に介在せざるを得ない状況の人間に、何かを生じさせたり、喚起させたりする力を有している言葉でもある。換言すれば、空虚感を覚えるからこそ、特定の想念を誘発するのである。その点では、これまで検討してきたように即物的で生々しい印象を与えるものの、さしたる思いが付随してこない「焼跡」という言葉とは異なる用い方である。また、「小さな村」や「氷花」における否定的イメージを伴うような空間としての「廢墟」とは、意味合いが異なっていることは明らかである。

さらに「何だかまだあの時の逃げのびて行く気持を呼び出す」とあるが、この「まだ」とは、八月六日から、ほぼ一か月半が経過した九月下旬の今になっても「まだ」という意味である。これは、日常においては取り立てて意識することがなくなつた「気持」を惹起してしまうことを示している。ここでの「廢墟」とは通常では識域下にある心理や感覚までもを顕在化させる力を有しているのである。それは、接近した場合のみならず遠望の場合にも当てはまる。「そういえば、曇々たる廢墟の彼方に山脈の姿がはつきり浮び出ているのも、先程から気づいていた」とあるが、ここでの「曇々たる廢墟」は、折り重なるように辺り一帯をふさいでいる個々の焼失した建造物の跡とも、それらを総括した市街の跡とも解することができる。いずれにせよ、「私」が「先程」発見し、ここで改めて確認した「彼方に山脈の姿がはつきり浮び出ている」という感覚は、「曇々たる廢墟」とのコントラストの中から浮上した新鮮な情景なのであり、今初めて気づいたかのような景観なのである。

かように「廃墟から」本文における「廃墟」という言葉の意味や用法を整理することができよう。では、それが作品全体と、さらには題名とどのように関わってくるのであろうか。

八 結び——〈廃墟から〉という題名が示すもの

本稿のこれまでの論点について簡単に整理しておく。次の六項目にまとめられよう

* 「廃墟から」において、一九四五年九月下旬のある日の時点で、「私」が「街」の状態を「廃墟」と認識する基底には、往路の車窓越しに目に入る「戦禍の跡」がもたらした、八月六日から八月八日までの「悪夢」のような記憶の回帰があった、ということ。

* 「廃墟から」において、広島という「街」を象徴する「猿猴橋」を渡ることと、「私」が「街」に関わる時空間の変転を実感し、それに伴い「私」の想像力も刺戟を受け、「廃墟」という認識が浮上するきっかけとなったのではないか、ということ。

* 「夏の花」において、「街」に対する「残酷な無機物の集合」という感覚や、「街」の「目抜の焼跡」に対する自然の潤いや生命感が失われて「パノラマ」と化しているという印象が、「廃墟から」における「廃墟」という認識の基底にはある、ということ。

* 「小さな村」や「氷花」における「廃墟」とは、辺り一帯の建造物の物理的荒廃が顕著で、そこに身を置く人々のありようも健全さに欠けてしまっているような空間という否定的な文脈の中で、いわば限定的に用いられている言葉である、ということ。

* 「廃墟から」において多用されている「焼跡」という語は、事象をそのままに言い表したものであり、言葉自体に多義性や含意性はなく、概ね伝聞や回想という文章中で用いられており、「私」が今、ここで視覚的に直接捉えたものではない、ということ。

* 「廃墟から」における「廃墟」とは、「私」の空虚な思いというものが反映した言葉であるが、その場に介在せざるを得ない人間に、特定の想念や感覚を、生じさせたり、喚起させたりするところの誘発力を有している言葉でもある、ということ。

以上の点を踏まえて、「廃墟」と眼差した後に、「私」が実家のあった場所の前に足を運んだ場面について検討してみよう。

私はほんやりと家の跡に佇み、あの時逃げて行った方角を考えてみた。庭石や池があざやかに残っていて、焼けた樹木は殆ど

何の木であったか見わけもつかない。台所の流場のタイルは壊れないで残っていた。栓は飛散っていたが、頼りにその鉄管からも水が流れているのだ。あの時、家が崩壊した直後、私はこの水で顔の血を洗ったのだった。いま私が佇んでいる路には、時折人通りもあつたが、私は暫くものに憑かれたような気分であった。(49頁)

ここは、まさに原爆直後に崩壊した実家を目の当たりしたところの「悪夢」のような記憶の原点たる場所なのである。それ故まずは「あの時逃げて行った方角を考えてみた」のである。それから改めて「家の跡」を凝視するのである。ここで一か月半前の「あの時」のことが、一気に時間を遡って、脳裏に蘇ってくる。その時「私」は「ものに憑かれたような気分」になっていた、という。「時折人通り」があつたことは窺い知れるものの、それを気に留めることもなく、「私」は「暫く」物思いに耽っていたのである。その場を通りかかった人からは、焼跡を前にした路上で、呆然とした状態で立ち尽くしている人物、というように見えたはずである。

ところで、この「ものに憑かれたような気分」とは、あたかも自分が「あの時」にいるような感覚を抱いたことを言っているのかも知れないし、「あの時」の自分が憑依したように感じられたということを表しているのかも知れない。いずれにせよ、そのような状態に陥ってしまう可能性として考えられるのは、「あの時」の体験が尋常ならざるものであつた、ということである。ただし、「廢墟から」には「あの時、家が崩壊した直後、私はこの水で顔の血を洗ったのだった」とのみ語られるだけで、具体的に示されていないので、遺憾ながら検討を加える余地はない(言うまでもなく、その時の尋常ならざる体験が詳述されているのが小説「夏の花」である)。では、「私」を「ものに憑かれたような気分」にさせてしまう別の可能性について考えてみよう。

そもそも、「私」は、なぜ「家の跡を見て来ようと思つた」のだろうか。それは「広島までの切符が買えたので、ふと私は広島駅へ行ってみることにした」という状況と同じく、「三」で触れたような当時の交通事情によって、これといった理由もなく「ふと」思い付いたものである。よって、そこが以前のように身を寄せることができる場所にはなりえないということを改めて自分の眼で確認したかった、という類の強い思いが急に生じたとは考えづらい。いわば、崩壊・焼失した家が現在どうなっているか、ということが何となく心をよぎった程度のものであつたのだろう。ただし、いざ行動を起こし、「家の跡」に向かう過程において、周囲の情景、特に「廢墟」なるものに遭遇にして、「私」の心持ちも多に刺激を受けた、ということは述べてきたところである。

しかしながら、そうした心情にある「私」が、「家の跡」で直接的に眼にしているものは、「庭石や池」・「焼けた樹木」・「台所の流

場のタイル」・「鉄管」から流れている「水」だけであり、それらからは、わずかに「この水で顔の血を洗った」ということが思い起こされるに過ぎず、前述の如く、ここから「ものに憑かれたような気分」というもの導かれぬ。

思うに、この時、「私」が凝視していたのは、そこから完全に姿を消してしまったものではないか。「廃墟から」には、次のような記述がある。

灰燼に帰した広島の家のあるさまは、私には殆ど想い出すことがなかった。が夜明けの夢ではよく崩壊直後の家屋が現れた。そこには散乱しながらも、いろんな貴重品があった。書物も、紙も机も灰になってしまったのだが、私は内心の昂揚を感じた。何か書いて力一杯ぶつつかってみたかった。(45頁)

「私」が「家の跡」で見詰めていたのは、「崩壊直後の家屋」の中に「散乱」し、その後「灰になってしまった」、「私」の「貴重品」である「書物」や「紙」や「机」ではなかったのか。それは「夜明けの夢ではよく」現れるものでもあり、文筆を生業とする「私」がそこに強い喪失感や空虚感を抱き続けていたとしても不思議ではない。この時の「私」は、そうした感情が湧き起こった状態であったのだろう。その時点で、「私」は「家の跡」を、単なる「焼跡」ではなく、まさしくこれまで述べてきたような「廃墟」として捉えているのである。だとすれば、そこから浮上してくる想念は、「何か書いて力一杯ぶつつかってみたかった」という文筆に対する熱情以外にはあり得ない。

すなわち、「ものに憑かれたような気分」とは、強い喪失感や空虚感を抱いたことで、これから「何か」を「書きのこさねばならない」⁽¹⁸⁾という強迫観念にも等しい覚悟、その重さに戦っている心理状態と解することが妥当である。よって、「廃墟から」という題名は、「廃墟」となった「家の跡」から、改めて「私」が筆を執る決意を固めることになった、という事態を意味しているのである。そこに「廃墟から」と命名した、作者・原民喜の意図が示されている。

ただし、物語では、そうした決意を再確認し、「昂揚を感じた」としても、妻を亡くし、住む家を失った自分の前途が明るいものではないということを「私」は自覚している、ということも示している。「私は暫くものに憑かれたような気分でした」に続く表現は、「それから再び駅の方へ引返して行くと、何処からともなく宿なし犬が現れて来た。そのものに脅えたような燃える眼は、奇異な表

情を湛えていて、前になり、後になり迷いながら従ってくるのであった（49頁）となつてゐる。その「宿なし犬」の異様な眼光や面立ちのありように、上京への熱望は滾るものの、実際の行動はなしえず、飢えと体調不良に苛まれている、という自分自身のもう一方の現実の姿を重ね合わせているのである。

しかしながら、その後、「私」は、「廢墟」としての「家の跡」で生じた「昂揚」に等しいものを、夜の「焼跡」という空間において、思いもよらぬ形で改めて実感することになるのである。「六」において引用した「廢墟から」における、「私」に関する物語の最後の部分を再掲する。

ふと、私はかすかに赤ん坊の泣声をきいた。耳の迷いでもなく、だんだんその声は歩いて行くに随つてはつきりして来た。勢のいい、悲しげな、しかし、これは何という初々しい声であろう。このあたりにもう人間は生活を営み、赤ん坊さえ泣いているのであろうか。何ともいいしれぬ感情が私の腸を抉るのであつた。（56頁）

前に、「焼跡」の「赤ん坊の泣声」に、「私」は人間の活力というものを感じ取り、心が動かされている、と述べた。この印象的な部分が本作品の題名と結びついている、とも指摘できよう。ただし、これは「焼跡」の場面であり、ここには「廢墟」という言及はない。題名はあくまでも〈焼跡から〉ではなく〈廢墟から〉なのである。しかしながら、「私」が、「ふと」耳にした、「焼跡」で発せられる「赤ん坊の泣声」から感受したのは、人間の活力の象徴的なものという一般的次元に止まらないはずである。数日前に「廢墟」から生じた「私」の文筆への情念、それは「私」においては生命力そのものである。そうした志を抱いている自分を、あたかも鼓舞しているかのように「赤ん坊の泣声」というものを受けとめているのである。なればこそ「何ともいいしれぬ感情が私の腸を抉る」という切実感の伴う、重々しい表現となつて結実しているのである。ここで「何ともいいしれぬ」とあるのは、実生活において困難を抱えているという状況認識と「何か書いて力一杯ぶつつかってみたかった」という思いとが心中で交錯するからである。「腸を抉る」とは、どんなに深刻な事態にあつても、揺らぐことのない執筆への熱情というものを改めて「私」が実感していることを示している。要するに、この「赤ん坊の泣声」との〈共鳴〉を描くことで、「廢墟から」における作者の意図は、より明確になるのである。

原民喜は、「廃墟から」という物語において、「廃墟」なればこそ湧出してくる創作への情念というものを描き、その決意を作品の題名に込めたのである。さらには、結果として、原民喜の願いは成就したのである。一九四九年刊行の小説集『夏の花』（能楽書林・さくる文庫）の「帯」にある文言にそれは示されている。佐々木基一によれば、その「宣伝文句」は「わたしの記憶にまちがいがなければ、これは原民喜が自分で書いた広告文⁽¹⁹⁾であるという。そこには「世紀の／閃光は／あざやかだつた／恐怖の／体験は／みごとに／描かれた／戦慄の廃墟から／みづみづしい／文学の／花は咲いた／明日の／人類におくる／記念の作品」(傍点引用者)とある。

【注】

- (1) 「廃墟から」の時系列の問題については、拙稿「原民喜と八幡村―『夏の花』・『小さな村』・『廃墟から』における形象化について―」(『教育・研究』22号・二〇〇九年)で詳述している。
- (2) 駅舎や橋梁などの被災状況については『広島原爆被災誌』(第三巻・一九七一年・広島市役所)に拠る。同書184～186頁。また、原民喜の「原爆被災時のノート」は、『原民喜全集』(一九六五年・芳賀書店)に掲載され(初出)、その後、「原爆被災の記録／原爆被災時のノート」として『定本原民喜全集』(一九七八年・青土社)に収録された。ここで用いた本文は、広島花幻忌の会事務局長の海老根勲が〈原民喜の「手帳」(「原爆被災時のノート」解題)〉(home.hirosima-u.ac.jp/hngkn/database/~/taniki-note.html)として公開した「ノート」の写真資料を基に、同「書き起こし文」や『定本原民喜全集』所収「原爆被災時のノート」本文も参照しつつ、活字化したものである(なお、『原民喜全集』・『定本原民喜全集』所収本文は句読点・改行・一部表記などにおいて原本と相違している箇所がある)。
- (3) 『広島原爆被災誌』(第四巻・一九七一年・広島市役所) 631～632頁
- (4) 『広島路面電車100年』今も昔も広島島の街を路面電車が走っていく(広島市郷土資料館・二〇二二年)。
- (5) 『新修広島市史』(第三巻・一九五九年・広島市役所) 444頁。
- (6) 『広島電鉄HP』・「広電電車の歴史 戦後復興の取り組み(昭和20年代)」www.hiroden.co.jp/train/history/history04.htm (二〇一七年六月二五日取得)。
- (7) 『広島路面電車65年』(広島電鉄株式会社・一九七七年) 165頁。
- (8) 『広島県HP』・「猿猴橋」https://www.prefhirosima.lg.jp/soshiki/97/enkoh-bridge2.html (二〇一七年六月四日取得)。
- (9) (資料)の絵葉書(稿者所持・広島〇〇堂発行)は、一九二六年以降一九四三年以前の橋の姿が映っており、一九三〇年前後に撮影されたものと考えられる。猿猴橋を束詰め方から撮ったもので、上流側には並行して猿猴橋水管橋が架設されており、西詰袂の南側にある建物は広島東警察署であり、同北側にある鉄筋コンクリート造りの建物は「新見商店」(一九三〇年以降は「向井文具店」)である(『絵葉書の中の広島』閉じ込められた街の面影』広島市郷土資料

館・二〇一三年)。また、同じ構図・絵柄の絵葉書(一部彩色)は広島市公文書館にも所蔵されており、撮影/発行年については「昭和(戦前)」と示されている。猿猴橋については、二〇一六年三月に、被爆七〇周年記念事業として、一九二六年当時の橋梁の姿に復元された。なお、後述する京橋の絵葉書については、広島市公文書館にも所蔵されておらず、存在の有無を含めて未確認である。

(10) 『広島原爆戦災誌』(第二巻・一九七一年・広島市役所) 12頁。

(11) (10) に同じ。13頁。

(12) 『新修広島市史』(第二巻・一九五八年・広島市役所) 700～701頁。

(13) 「目抜の焼跡」の「印象」を反復・換言して表現している点については、拙稿「原民喜『夏の花』論——『私』が『書きのこさねばならない』ことについて——」(『中央大学国文』二〇〇七年三月)でも簡単に触れたが、本稿の記述を補完するために、ここで改めて整理しておく。引用部分における、対応関係にある表現と書き改めの要点は以下の通りである。

・「ギラギラと炎天の下に横たわっている銀色の虚無のひろがりの中に、路があり、川があり、橋があった。そして、赤むけの膨れ上がった死体があるところに配置されていた」

← 「ギラギラノ破片ヤ／灰白色ノ燃エガラガ／ヒロビロトシタ パノラマノヨウニ／アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキミヨウナリズム」

* 「虚無のひろがり」という観念的な把握や「配置されていた」という生硬な物言いを「ヒロビロトシタ パノラマノヨウニ」という平明な比喻を用いて表現している。

・「これは精密巧緻な方法で実現された新地獄に違いなく、ここではすべて人間的なものは抹殺され、たとえば死体の表情にしたところで、何か模型的な機械的なものに置き換えられているのであった」

← 「パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ」

* 漢語表現を用いた理屈っぽい言い回しを端的な表現で言い切っている。

・「苦悶の一瞬あがいて硬直したらしい肢体は一種の妖しいリズムを含んでいる」

← 「アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキミヨウナリズム」

* 動かざる死体に、その直前までの律動というものを感じ取るという感覚的表現がそのまま受け継がれている。

・「電線の乱れ落ちた線や、おびただしい破片で、虚無の中に極學的の図案が感じられる」

← 「アスプストケムル電線ノニオイ」・「ギラギラノ破片ヤ」・「パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ」

*容易に言語化しえない光景は「パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ」という認識に収斂されている。

「だが、さつと転覆して焼けてしまったらしい電車や、巨大な胴を投げ出して転倒している馬を見ると、どうも、超現実派の画の世界ではないかと思えるのである」

← 「テンブクシタ電車ノワキノ馬ノ胴ナンカノ フクラミカタハ」・「パット剥ギトツテシマッタ アトノセカイ」

*これまで全く遭遇したことのない現象や構図に接したことで、現実の光景ではなく創造された世界のように感じられてしまうという説明を、一句の中に包含している。

こうした書き改め＝反復・換言の意味するものは、「目抜き焼跡」の「印象」を「私」なりに言を尽くして書き記してきたものの、どこか意に満たないものがあり、漢字片仮名混じりの表記で、「印象」の要点のみを端的に表象する〈詩〉の形式でしか表現しえないと感じたからに他ならない。なお、対応関係のない表現として「スベテアッタコトカ アリエタコトナカ」がある。この〈手記〉＝「夏の花」という物語は、感情的な表現をほとんど用いずに記述されているのだが、それまで封印していた感情を一気に表出した、「私」の〈叫び〉となっているのである。

(14) 小説集『夏の花』に収められている「壊滅の序曲」(一九四九年一月号『近代文学』)の冒頭部分に、かつて広島に住んでいた「旅人」とその友人である広島在住の「男」(正三・視点人物)に関する次のような記述がある。

橋の中ほどに佇んで、岸を見ていると、ふと、『本川饅頭』という古びた看板があるのを見つけた。突然、彼は不思議なほど静かな昔の風景のなかに浸っているような錯覚を覚えた。が、つづいて、ぶるぶると戦慄が湧くのをどうすることもできなかった。この粉雪につつまれた一瞬の静けさのなかに、最も痛ましい終末の日の姿が閃いたのである。……彼はそのことを手紙に誌して、その街に棲んでいる友人に送った。そうして、その街を立去り、遠方へ旅立った。……その手紙を受取った男は、二階でぼんやり窓の外を眺めていた。(中略)いつのまにか彼は友人の手紙にある戦慄について考えめぐらしていた。想像を絶した地獄変、しかも、それは一瞬にして捲き起るようにおもえた。そうすると、彼はやがてこの街とともに滅び失ってしまうのだろうか、それとも、この生れ故郷の末期の姿を見とけるために彼は立戻って来たのであろうか。(62～63頁)

これも、「残酷な無機物の集合」という言葉と同様に、〈直感による視覚的イメージ〉として「この街」の「壊滅」した姿を予感するという形で述べたものであるが、作品の題名にも用いられている「壊滅」という事態の後におとずれる状態を言い表すものとして「廃墟」という言葉は適合している。なお、「壊滅の序曲」の作品自体の解析については、拙稿「原民喜『壊滅の序曲』の時空間——この街」はどのように語られたか」(『中央大学文学部紀要』107号・二〇一〇年三月)を参照されたい。

(15) 石丸紀興「広島駅前ヤミ市の変遷とその特徴」(『広島市公文書館紀要』18号・一九九五年三月)。

(16) 小説『夏の花』が「N」の話で締めくくられている点については次のように整理できよう。「私」は原子爆弾による悲惨な災禍を目にし、数多くの死傷者に触れ、それは心の中の大きな傷となっていた。また、「私」には「自分が生きながらえている」という実感に端的に示されているように亡き「妻」に対する深い思いに伴う心の傷を有していた。そうした「私」の耳に「N」の、妻の死体を探し求めて街のいたる所をさまようという体験が飛び込んできた。「N」の体

験は、「私」の「妻」が一九四五年八月六日に存命だったならば、まさにあり得たことであり、「N」のおかれた状況を、「私」自身に置き換えた場合、最も耐え難い苦痛として想像されたに違いない。そこで、原子爆弾による悲惨な災禍と数多くの死傷者について、すなわち「このこと」について「書きのこさねばならない」という決意と、「N」の体験を耳にした衝撃と、そこから想起された墓参の記憶とが結びついていったのである。この〈手記〉が冒頭に亡妻の墓参を配置し、「N」に関する話で結ばれているのは、原子爆弾によって亡くなった人々を悼む心と、「N」に関する話を契機にしてより深まった「妻」の死を悼む心とが、「私」の中で重なり合ったことを示しており、その点がこの〈手記〉の中心的な思想である。

さらに、「N」の体験部分の表現上の特徴に注意する必要がある。「N」の体験部分は、伝聞的物言いを一切用いず、「N」自身が見聞した出来事を、「N」自身の内面に出来た感情や評価もそのまま書き記していることにある。そのことは「私」と「N」との不可分の関係性を示す「あの衝撃」という言葉や、妻の死体探しを断念せざるを得ない「N」の痛恨の思いと、それに〈共苦〉している「私」の思いが込められている「最後に」という言葉にも示されているように、「N」の話を他人事とは思えずにいる「私」の姿が浮上してくる。そこに「私」の想像力を見て取ることができる。

「廃墟から」においても、「流川町の楨氏」の身の上に降りかかった災難も、妻子が行方不明となり、恐らくは死亡しているものと思いつつも、彼らを捜し求めずにはいられないのである。その境遇とそれに伴う「街」を歩き回るといふ行動に精神的に同調している「私」の思いが反映している。

(17) (10) に同じ。408～409頁。

(18) 「書きのこさねばならない」とは、「夏の花」にある言葉で、慌てて避難してきた「私」が川岸で一息吐いた場面で「かねて、二つに一つは助からないかもしれない」と思っていたのだが、今、ふと己が生きていることと、その意味が、はっと私を弾いた。このことを書きのこさねばならない、と、私は心に呟いた(14頁)とある。これは、自分が死ぬことなく生き残っているという事実と向き合い、自分がなすべきことを自覚することによって、つまり、自分の〈いま〉(ここ)を確認することによって、「私」の〈手記〉作成の思念は生じた、ということを示している。それは同時に、「私」という人物にとつて、文章を書き記すことが、己の人生において、重要な営為となつていくことも物語っている。なお、「このこと」とあるが、その後に「けれども、その時はまだ、私はこの空襲の真相をほとんど知ってはいなかった」とあることから、被爆直後に体験した「この空襲」による事象というものを直接的には示している。むしろ、「このこと」自体は、「この空襲」の体験直後に想定した時点から、それ以降、〈手記〉執筆の段階までに、様々な〈情報〉を通じて知り得た「真相」によって大きく拡がっていったことは言うまでもない。また、「書きのこさねばならない」という言葉にも注意を払う必要がある。「書きのこす」とは、文章に書いて後世に残すという意味で用いられる。この言葉は、「私」がどうしても伝えずにはいられない事象や思いについて、換言や反復、比喩や例示などを駆使して記述されているこの〈手記〉の特質と相応している。同時に、遺書について用いる例の多い、この「書きのこす」という言葉にはどこか〈死の影〉が揺曳している。

(19) 『小説集夏の花』(一九九八年・岩波文庫) 所収、佐々木基一「解説」214頁。

